

見上げた月明かりと同じくらい  
その姿は儚く消えてしまっただった

この日も朝から雨が降っていた。

一寸先が見えないような酷い土砂降りだという訳ではなかったが、部屋の窓を叩く雨音は時に文字の中へ踊らせていた意識をも引き寄せる程の存在感を持っていた。

そんな雨音に呼ばれたような気がして、目を落としていた文庫本の紙面から怠惰に顔を上げる。

目を向けた先の窓ガラスの向こうはやはりどんよりとした重い色で、ここ連日続いている愚図つく空も何も変わりがなくそのままだ。

暦の上では既に夏になり、制服も春の時分より身軽なものへと衣替えされた。けれど、この空の色を見ているとまるで雪の舞う冬空のような重苦しさを感じてしまう。

故に、身体の芯が底冷えする寒さの代わりに、息苦しくなる程の湿気に見舞われている現状は、この時期特有の氣象現象であると判ってはいても流石に頂けないものがあった。

そんな事をゆるゆると思いがらしばらく窓を打つ雨音を聞いていたが、それを遮るように扉をノックする音が部屋に響いた。

返事を返す前に扉が開かれ、トマトソースと焼き物の香ばしい香りが部屋に広がる。

「八重垣さん、夕食の時間ですよ」

人好きのする笑顔を零しながら部屋へ入ってきた金色の髪の毛のシスター——ダリア——バスキア教諭がテーブルへと料理が乗った皿を置いていく。

もうそんな時間だったのかと部屋の時計を見上げると、確かに夕食が始まる時間はとうの昔に過ぎていた。

「すみません、バスキア教諭。お手間をお掛けしました」

「いいですよ。なかなかいらっしやらないから調子を悪くしているのかと思っただけで、そうではなかったみたいだから」

と、わたしが手にしていた文庫本を見て笑みを零す。

今日は食堂で夕食を摂ると前日に約束していた事を、本に夢中になっていた所為ですっかり忘れてしまっていた。

その事に気付いたのも、彼女が部屋へ来た事と、彼女が手にしていた料理を見てからだだった。

読みかけの文庫本に扉を挟んでベッドへ投げ置くと、わたしの特等席であるベッドに近い側のテーブルへと車椅子を寄せる。

置かれていたのはトマトソースが掛かったチキンステーキとコンスープ、クルトンが散らされたシーザーサラダとレズンがふんだんに使われたバターロール数個だった。

同じメニユーが並んだわたしの左隣へと椅子を付け腰かけ、丁寧<sup>マナー</sup>に十字を切ったバスキア教諭に続いて、お決まりの食前の祈りの言葉を口にする。

神などを碌<sup>く</sup>に信じてもない自分が、神を崇拜するシスターの隣で祈りを捧げるなんて滑稽にも程があると、もう何度目かもわからない思いを自嘲する。

最後の結びの祈りを唱えると、

「では、いただきますしよう」

「いただきます」

手を合わせた後、自身の前に置かれたスプーンとコンソープのカップを手に取り、ひと口。濃厚で舌触りのいいともろこしの甘みがふわりと鼻を抜け、その柔らかな香りにはうと大きく息を吐いた。次いで二口三口と口に運びカップを置くと、

「いつも私が選んでいるけれど、これで良かったのかしら？」

と、付け合わせのポテトフライと共にチキンステーキのひと欠けを頬張ったわたしを見て、バスキア教諭が訊ねてきた。

「っ……んぐ、ここの食事は何をとつても美味しく外れがありません。が、敢えて言うなら、肉料理は大歓迎です。前に持って来て下さった仔牛のカツレツは本当に美味しかったです」

「ふふっ、夢中だったものね」

「それだけ気に入っています。あの、もし今度またメニユーに上がってきたら」

「ええ。持っていけますね」

「ありがとうございます」

こちらまで嬉しくなる笑顔でそう言ってくれた彼女に笑みを返して、頬張り途中だった残りのチキンを囓った。

「明日も雨なんでしょうかね」

横目で濡れた窓ガラス越しに外を見遣る。

「ええ。今週もずっと雨という予報だそうよ。今は梅雨の季節だものね」

「はあ。そうですね……」

明日にでも今読み返している時代小説の続きを借りに行こうと思っていたのだが、出鼻を挫かれた気持ちになった。

雨の中を行くだけなら濡れないように雨具を用意すればいいし、そこまで面倒とは思わない。だが、短い距離でも、し

つかりと踏み慣らされてはいるが未舗装の濡れた土の道を車椅子で通り、着いた先でも戻った先でも車椅子のタイヤを丁寧に拭かないとならないという面倒は、進んでやろうという気にはならない。

人に頼むという手もあるが、散々丁寧に説明しても間違つた本を持って来られた時の絶望感にも似た歯痒さは如何ともしたい。

『本』なら何でも読む方だと自負しているが、時としてこれではなくては駄目だという本もある。それを何度か次女で体験していたわたしは、人にお勧めを訊かない限り自分で選ぶようにしていた。

相当仏頂面をしていたのだろうか、コーンスープのカップへ口を付けていたバスキア教諭がわたしを見て小さく笑った。

「八重垣さんは、雨はお嫌い？」

「読書のお供のバックグラウンドミュージックとしての雨音は好きですが、現実問題として面倒な事の方が多いので、心象は最悪です。特に、湿気が強くなると髪が言う事を聞かなくなるので」

と、朝からの強い湿気で普段以上に跳ねている癖のある髪を指先で撫で付けて見せた。

「そうなの？ とても可愛らしくて良いと思うのだけれど。元氣いっぱいという感じがして」

「このじゃじゃ馬は元氣だけが取り柄ですから」

わたしの返しに可笑しそうに笑みを零す彼女の頬を、癖のない淡いブロンドの髪がくすぐっていた。

彼女が動く度にさらさらと揺れる細く柔らかそうな毛先を盗み見、体質が違う事への純粹な羨望と、それに指を絡め触れたいという、どこか邪な感情が胸の奥で沸き立つ。

相反する二つの思い抱いた事を知られたくなくて、カップにあった残り少ないコーンスープで咀嚼途中だったレタスと共に無理矢理流し込んだ。

しばし無言で食事が進み、最後のひと口のパンを飲み込んだ所で、

「八重垣さんは、最近図書室へ行っているかしら？」

と、先程の雰囲気から少しトーンの落ちた声で、そう訊ねられた。

「昨日は今日と同じで雨が酷かったので、一步も寄宿舎から出ていませんが。一昨日なら、昼の止み間に方喰寮長の付き添いで本を何冊か借りに行きました」

でも、それが何か？と話を促すと、

「じゃあ、最近……白羽さんとお話は、なさった？」

恐る恐るといった風にバスキア教諭は白羽の名を口にする。

それを聞いて、瞬時に脳裏に過ったあいつの背を強引に振り払うよう、わたしは被りを振ってみせた。

「いえ。ここ最近話をするどころか、白羽本人の姿を見てもいません。文字通りの引きこもりなので」

「いつでも学舎へ来て頂戴。きっとクラスの皆も喜ぶわ」

「あ……それは、追々」

余計な事を言ってしまったかと内心で溜息を吐くが、それと同じタイミングでバスキア教諭も小さく溜息を吐いた。

彼女の溜息の理由など、わざわざ訊ねなくとも嫌という程理解している。そして、それはわたしやバスキア教諭だけが知り得ている事柄ではない。

少しの間を置いて、何か決心したのか僅かに俯いていたバスキア教諭が顔を上げ、わたしへと向き直る。

「あのね、八重垣さん。お願いがあるの」

はつきりとした口調とは裏腹に、わたしを見る表情はどうか不安そうだった。そして、その表情から何を言い出すのかを察するのも至極簡単な事だった。

「金貸せて話以外なら、聞いただけ聞きますよ」

沈痛な面持ちの彼女をあまり見ていたくなくて、軽口でそう答える。わたしの言い様にふと表情を崩したバスキア教諭は、

「もし……白羽さんとお話をする機会があつたら、話を聞いてあげて欲しいの。白羽さんも八重垣さんと同じくらい本が好きみたいだから、きっと同じ話題で話がしやすいのではないかと思うし」

自分だとうどう接しても彼女を追い詰めてしまうだろうから。

少し悲しげな色を映した金色の瞳でわたしを見据え、そう口にした。

少し前ならば、その目を見る前に——彼女が憂いを帯びた溜息を零した時に——わたしは躊躇いなく彼女へ手を差し伸べていたと思う。けれど。

「……まあ、その時があれば」

それにはどうしても、手を差し伸べるでも振り払うでもない曖昧な返事しか、返す事が出来ないでいた。

「ごめんなさい、急にこんなお願いをしてしまって。八重垣さん、頼もしいからつい頼ってしまって。私は……」

「バスキア教諭は、アングレカムの生徒を思いやり支え、優しく導いてくれる、とても素敵な先生です。わたしはそう信

じていますし、他の皆だって、きつと同じ事を言います」

謙遜ではなく自身を卑下する言葉が連なる事が容易に判つてしまい、今度こそ我慢出来ずまくし立ててしまふ。

一瞬きよとんとわたしを見るバスキア教諭の表情が次第に崩れ、いつも見せてくれる人好きのする笑顔とも違う、とても素直な少女のような笑顔を目の当たりにする。そんな不意打ちを食らって、だからそんな事を言うなと続けようとした言葉を咄嗟に飲み込んでしまった。

「ありがとう、八重垣さん。貴女にそう思ってもらえる事は、とても嬉しいわ」

「あ……えつと……はい……」

真つ直ぐな好意を向けられ嬉しさと気恥ずかしさにたじろいでいると、バスキア教諭はテキパキと空いた皿を重ね、料理を持って来た空の配膳台へと食器を乗せていった。

「では、またお風呂の時間に迎えにきますね」

「判りました」

再度笑顔を残し、彼女は空になった食器と共に部屋を後にした。

その背中を見送り、部屋の扉が閉まったのも見届けて、わたしは大きく溜息を吐いた。

「……焦った……」

小さくぼやいて車椅子の背もたれへ身体を預ける。

体重を支えた車椅子が小さく軋み、それに追従するかのよう、窓を叩く雨音が大きく部屋へ鳴り響いた。

憧れの女性の笑顔を崩したくなかったただだと自身に言い聞かせる。実際、それ以上の理由など無かった。

彼女に憂い顔は似合わない。だから、言葉を重ねた。

全てでなくともそれは確かに届いたのだと、柔らかな笑顔を思い出し内心で独り言つ。そうして、

「……届くはずなんだ」

もう一度、声にして吐き出した。

先程振り払った悲しみに沈む背が脳裏を過る。

それは、意図して振り払わないといつまでも胸の中に残ってしまう澱そのものだ。

バスキア教諭には「白羽には会っていない」と言った手前だが、実際には一日の中で相手の姿をちらりと見遣る程度に行き違う事はある。それをそれぞれが認識しているか否かの違いだけだ。

そうしてちらりとすれ違う度に、白羽が纏う悲しみが深くなっているような、手を伸ばしても指先すら届かない轍を刻

まれているような、焦燥感に似た感情が沸き立ち胸の奥へと降り積もるだけだった。

居なくなつた級友が白羽にもたらししたもの、単純な別れへの憂いだけではなかつた。故に、より一層痛ましさを感じているのだ。

当事者である白羽も。それを見守るもう一人のアミティエや他の級友も。

——この、わたしでさえ。

いまだ降り続く雨音が耳の奥に響く。

少し前まで優しい音色だと思っていたそれは、たんとんと不規則なりズムを刻む程にも悲しく聞こえてしまい、それを振り切るようにわたしは再度読みかけた文庫へと手を伸ばした。



日々の日課としてのバスキア教諭との風呂の時間も過ぎ、突然転がり込んできた姦しい級友達が部屋でひとしきり騒い

で行つた夜半。

「何でわたしがあいつらを接待しなきゃならないんだ」

置き土産としてテーブルに残されたブリキ缶へと、取り分けに使つたティッシュペーパーの上に残つたクツキーを戻すわたしに、

「お片付けはわたしがするから」

あんまり怒らないであげると、おさげを揺らしながら床に散らかされた本や空のカップを取り上げて行く我がクラスの委員長——花菱立花がやんわりと笑つた。

「茶を飲むだけなら自分の部屋でいいだろうがよ」

「それが、方喰寮長に目を付けられてしまつたそうで、消灯時間の頃に一番最初に部屋に確認に来られるようになったのだから。見回りの時間にも不意打ちで何度か見に来るそうで、見張られているようだから文句を零していたわ」

「そりゃ、あいつらの自業自得だろ」

「二度も厳しく注意されたのにまだ懲りてない所とか、彼女達らしいわ」

思つてもない事を口にされ、可笑しそうに声を潜めて笑う

花菱をついまじまじと見つめてしまう。

「なあに？ 何か付いてる？」

「いや。お前は方喰寮長と同じで、規則に厳格なイメージでいたんだが。どうやら思い違いらしい」

「えっ？ そう……？」

わたしの言葉が意外だったのか、花菱は少し戸惑った表情でわたしを見返した。

「ああ。だから、見回りの時間を過ぎてからお前が沙沙貴達を連れて部屋に来た時は驚いたよ。明らかに規則違反だからな」

「それは、そうなのだけれど……」

片付け途中だったカップを重ねる手が止まり、それまで明るかった表情にさっと陰りが差した。

「前に沙沙貴さん達と夜のお茶会をしようって約束もしていたし。自分の部屋だと、蘇芳さんに迷惑が掛かってしまうから」

と、バツが悪そうにそう口にした。

「お前の淹れた茶なら喜んで飲むんじゃないか？」

「お風呂の時も気分が優れないようだったから、戻ってすぐに横になるように勧めていたの。沙沙貴さん達が来た時はよく眠っていた様子だったし。……この頃あまり眠れていないみたいだから、少しでも休んで欲しくて」

徐々に沈んでいく声と共に肩を落とした花菱は、やがて小さく溜息を零した。

水を向ける方向を間違えたかと癖の強いざんばらな髪をガリガリと掻き上げると、わたしは僅かに残っていた自身のカップの紅茶を呷った。

「まあ、目の付け所は合ってるんじゃないか？ ここは滅多に踏み込まれる事はないからな。わたしの人徳故だ」

呷ったカップをテーブルへ置くと、その様子を見ていた花菱が小さく笑った。

「日々の生活で方喰寮長と一緒にいる事の方が多いからでしょう？ 普段の生活態度が判っているのなら、そこまで厳しく見回る事もないでしょうし」

さも当然と言いつける言いに、わたしは再度驚いた。

「何だ、お前。もしかしてそこまで計算済みでここに来たのか？ てつきり沙沙貴がそそのかしたのかかと思っていたんだが」

「実を言うと、八重垣さんの所は最後の砦だったの。ここへ来る前に何人か当たっていたのだけど、色良い返事を貰うことが出来なくて」

どこか申し訳なさそうな笑みを零しながらそう口にする花



菱を、今一度まじまじと見つめてしまう。

正義感の強い愚直な奴だと思っていたが、なかなかどうして、悪知恵も働くらしい。これまで接してきた中で感じていた堅苦しいイメージが若干崩れた瞬間だった。

「……マユリがアングレカムから居なくなつて悲しんでいるのは、蘇芳さんだけではないもの」

静かにぼつりと呟かれた言葉に、何度か見たクラスの雰囲気を感じ出した。

授業間の短い休憩中だという事を差し引いても、教室の空気が見るからに沈んで活気を感じられなかったことがあった。特に、句坂がアングレカムを去つたと知らされた翌日は本当に酷かつたものだ。

それまでも何度かクラスメイト間でのすれ違いなどで教室全体の空気が悪い事もあったが（そのひとつはわたしも関与している事だったが）、言うほどまでではなかった。

それほどの影響力を持っていたのか、と内心で溜息を吐く。

……本当に、つくづく気に食わない奴だ。

「だから話し相手が欲しかったのだと思うわ。八重垣さん、沙沙貴さん達に負けず劣らず面白いお話をたくさん知っているもの」

「ただの世間話だろ。買い被りすぎだ」

クッキークッキーの残りを戻し終わると、ブリキ缶の蓋を閉め花菱へ向き直る。向こうも空のカップを小さなトレーに纏め置き終えたところだった。

「八重垣さんのカップは？」

「自分の事は自分でやる主義だよ」

「それなら、このカップはわたしが洗いに行かなくちゃね」

と、花菱が持ち込んできた奴のお気に入りのカップ達を見て笑った。

「残つた紅茶はどうする？ 置いておきましょうか」

追加を足してまだ半分以上も残っている質素な飾りの付いた紅茶のポットを視線で指す。

「流石にこんなに残っていると捨てるのは勿体ない。冷めても温め直せば十分飲めるし、こいつはわたしがクッキーと一緒に責任を持って頂くよ。ポットは明日返す」

「判つたわ。遅くまでごめんなさいね。おやすみなさい」

「おやすみ。もう来るなどは言わないが、今度はもつと早い時間にしてくれ」

片手をひらひらと振つて応え、トレーを携えて部屋を出て行く花菱の背を見送る。